古代史に遊ぼう

第 33 回　－伯耆・出雲へ遠征（その１）－

懸案の出雲遠征を実現しようと話題にしている間に、計画と人員がふくらんだ。琵琶湖周辺に住む有志３人の追加参加、１人は出雲出身で今は境港にも家がある、さらに大田市（石見）から有力な現地参加者が加わり総勢７名となった。名幹事が、伯耆の遺跡からはじめて出雲に所在する史跡を地理的・時間的に効率よく訪れる計画を立案してくれた。その企画はゆとりある時間を生み、宿では浅酌懇談して大いに歓を尽くすことができた。遠征中に見聞した古代史の謎には興味有るテーマが沢山あるのだが、細かなことはさておき印象の薄れぬうちに旅行記としてまとめ、２回に亘って概略を報告することとしたい。

旅行の開始地点米子までは、京都から新幹線で岡山、そこで伯備線特急に乗り継ぎ移動した。やくも号は倉敷から高梁川にそって北上、松山城で有名な備中高梁、姫新線と交差する新見を過ぎて、谷田峠（トンネル）で備中から伯耆の国に入った。対向列車待ち合わせのため停車したのが根雨駅、ここは昔の出雲街道の有名な宿場町である。

● 妻木晩田遺跡

米子駅前でレンタカーを借りだし、妻木晩田遺跡（むきばんだ）へと向かう。途中、高速道路から伯耆大山の眺めを満喫する。この遺跡は大山に連なる高霊山から北に延びた丘陵上にある弥生集落跡である。１９９５年から三年間の発掘調査が行われ、遺跡全体で５００棟以上の掘立柱建物跡、４００棟以上の縦穴住居跡、３４基の四隅突出型墳丘墓が発掘されている。遺跡は住居区、墓地、倉庫群など用途に応じて地域的に使い分けられていたことが判り、現在は県立史跡公園としてよく整備されている。ここでは妻木山地区（住居区）と発掘体感広場・遺構展示館を見学、丘からの素晴らしい日本海の眺望を楽しみ、その他は残念だが時間の都合でカットした。山陰には多数の弥生遺跡があるが、その中でも妻木晩田は吉野ヶ里に匹敵する国内最大規模の遺跡の一つである。

近くには史跡上淀廃寺跡や角田遺跡などがあるがそれらはパスして、東出雲の黄泉比良坂（よもつひらさか）を目指す。国道９号線のＪＲ揖屋駅の近くで案内の看板を見つけることができた。整備された小道を辿ると突き当たりは駐車場で、その一段上に「神蹟黄泉比良坂伊賦夜坂伝説地」の石碑と神話の説明板が建てられている。「妻の死を悲しんだイザナギが、黄泉の國までイザナミを訪ねる。そこで、姿を見ないという約束を破ったイザナギは怒ったイザナミと鬼たち追われて一目散に逃げ帰る。最後にイザナギは千引磐で坂の道をふさぎ二度と行き来できないようにする。」それが黄泉の国と此の世の境である黄泉比良坂であると神話は伝えている。説明板にはもう一つの神話、「オオナムチがスサノオのもとで様々な試練を克服し、帰ろうとしたとき追ってきたスサノオがオオナムチにオオクニヌシの名前を贈り國作りを託した」という話も紹介されている。ここは今はやりのパワースポットとなっているのであろう、鄙びた場所であるがマイクロバスなどで女性の群れが訪れ、結構賑わっていた。

● 黄泉比良坂

県道に戻り大根島を経由して境港に渡る道を選ぶ。ボタンの栽培で有名な大根島には牡丹園が沢山あるが、花季は過ぎていて交通はまばらであった。傾斜で有名な橋を二つ渡ると境港である。市内を横切って、境水道大橋を島根半島へと渡り先端を目指す。そこに鎮座するのが美保神社、ご祭神は三穂津姫と事代主神で由来解説には「三穂津姫は高天原から稲穂を持って地上に降り、大國主神の御后神となられた。事代主神は大國主神のお子神でえびす様の名で世に知られる。また、古事記、日本書紀の国譲り神話で御父神からその可否を委ねられた神と伝えられている」とある。参詣の後、島根半島東端の地蔵岬へ一走り美保ヶ関灯台を展望台から眺めて引き返す。境水道大橋を戻り、先発の地元人と合流して、今夜の宿である彼の家に向かう前に、海辺の温泉（スーパー銭湯）で風呂を浴びてさっぱりする。宿ではくつろぐ間もなく、海産物のご馳走攻勢である、一人一匹ずつの蟹を手始めに、大皿に並べられた刺身・貝類など鮮度抜群のもの、９種類と言うが名前が判別できたのはアジ、トビウヲ、タイくらい、それらをビール、地酒と共におおいに賞味した。第一日の見聞について話す内に、皆トロンと眠くなりそれぞれの部屋に分かれて熟睡。

第二日は朝食後、近くの「水木しげるロード」に散歩に出かけ、道の両側に妖怪像のオブジェが並んでいるのを面白く見物した。本日の最初の見学は安来市の和鋼博物館である。中国山地は良質の砂鉄と豊富な森林資源に恵まれ、古代からタタラ製鉄が盛んに営まれていた。この博物館は伝統的製鉄法「たたら」に関する総合博物館である。興味有る展示をいろいろと見ることができた。「古代の鉄」を巡っては製造・流通を含めて別に独立総合して報告する予定で、詳細はここでは省略する。

●松江城

一路、松江城へと向かう。大手前に駐車し、城の見学に向かう一行を見送り、石見から参加の仙人の合流を待ち、広場の木陰で久闊を叙し歓談、お城見学の一行を待つ。移動し宍道湖畔「臨水亭」で石見仙人ご招待の豪華な昼食をご馳走になる。圧巻は宍道湖七珍の雄「スズキの奉書焼」、スズキに軽く塩をふって一晩置き、奉書で包んで水を掛けながらじっくりと蒸し焼きにする。ほっくりとした白い身に焦げた和紙の香りが加わり、風雅な味わいである。食後には不昧公好みの和菓子の老舗「風流堂」を訪れて、名菓と抹茶の振る舞いに預かりこれぞ松江と大いに満足した。

さて、午後は古代出雲の中心地で見所の密集している南方の「意宇（おう）」へ向かう。まず、八重垣神社に参拝、素戔嗚尊（スサノオ）が八岐大蛇を退治した後、稲田姫の両親の許しを得て、この佐草の地に宮作りして、夫婦の宮居としたという、奥には和紙に硬貨を乗せて水に浮かべ、恋の占いをする鏡の池がある。次に、八雲立つ風土記の丘（岡田山古墳群）と展示学習館を訪れる、目玉の展示品は形象埴輪の「見返りの鹿」「力士」「石屋古墳」と額田部臣銘文入太刀などである。近くには出雲国造ゆかりのイザナギ･イザナミを祀る神魂（かもす）神社があり参詣、ここの本殿は宇豆柱が外側に見える古式の大社造様式を残すものとして国宝に指定されている。一寸足を伸ばすと、國引きを終えた神が杖を突き立てたという古代出雲の中心地出雲国府跡である。歩いて遺跡を横切り、隣接の六所神社（総社）に参詣する。ここでかねての疑問であった、関東各地に散在する総社が「六所」と名乗っている由来を知ることができた。即ち国内の天神地祇、天地四方（天地と東西南北の六方）の神を併せ祀るのが「六所」総社の意味だという。

●神魂神社

●熊野大社

第二日の締めくくりは出雲国一の宮「熊野大社」への参詣である。主祭神は櫛御気野尊（クシミケヌ）が本殿に祀られているが、この神名は素戔嗚尊の別神名とのことである。神社の前には清らかな意宇川が流れ、朱塗りの八雲橋が懸っている。本殿の右手に御后神の稲田神社が、左手に御母神の伊邪那美神社がある。鑽火殿は熊野大社独特の社殿で、萱葺き屋根に四方の壁は檜の皮で覆われ、竹でできた縁がめぐらされている。そのなかに発火の神器である燧臼（ひきりうす）、燧杵（ひきりきね）が奉安されていて、毎年の鑽火祭（さんか）や出雲国造の襲職時の火継式斎行の祭場となる社殿である。宿は熊野大社の隣に建つ「ゆうあい熊野館」で、八雲温泉の露天風呂に入り、夕食の時には、古代史トピック、本日の見学先、明日の予定先について語り、旅の疲れもあってこの日も早寝であった。

旅行の名幹事であり､撮影した写真の掲載を許諾頂いた吉本吉彦氏に感謝いたします。

（岡野　実）